

氏名（本籍）	フジ 藤	タ 田	シゲル 茂	（広島県）
学位の種類	博士（音楽学）			
学位記番号	博音第106号			
学位授与年月日	平成19年3月26日			
学位論文等題目	〈論文〉《トゥランガリーラ交響曲》《峡谷から星々へ…》《彼岸を照らす閃光…》 ーメシアン音楽における「かたち」の問題と新しい分析法の創出ー			
論文等審査委員				
（論文審査主査）	東京芸術大学	教授	（音楽学部）	船山 隆
（論文副査）	〃	〃	（ 〃 ）	片山 千佳子
（ 〃 ）	〃	助教授	（ 〃 ）	大角 欣矢
（ 〃 ）	群馬県立女子大学	教授	（文学部）	戸澤 義夫
（ 〃 ）	東京大学	助教授	（大学院総合文化研究科）	長木 誠司

（論文内容の要旨）

本論文は、オリヴィエ・メシアン（1908-1992）の管弦楽のための3つの大作、《トゥランガリーラ交響曲》（1946-48）、《峡谷から星々へ…》（1971-74）、《彼岸を照らす閃光…》（1987-91）を「シェーマ分析」と呼ばれる新しい方法で分析し、これによって、メシアンの音楽独自のフォルム（「かたち」）を明らかにする試みである。

メシアンの音楽にはフォルムがないと見られてきたとすれば、それは、第一には、音楽におけるフォルムが、調性音楽の実践を類型化したフォルムの定式、すなわち「形式」あるいは「楽式」と混同されてきたこと、第二には、メシアンの音楽独自のフォルムを記述するだけの言葉を、研究者はおろか、メシアン自身でさえ持っていなかったことに起因している。本論文は、フォルムを「部分を集めて全体へと形づくっていく形成作用」と再定義し、シェーマ分析という新たな言葉によって、これまで謎のまま残されてきたメシアンの音楽のフォルムの問題に答える。つまり、この作曲家の音楽を構成する多種多様な「ブロック」が、たんなる寄せ集めを超えて、「作品」という全体に向けて形成されていく様を記述するのである。

第1章では、メシアンの音楽の分析の歴史が特にフォルムの分析という観点から眺め返される。最初に、メシアンの音楽を多種多様な素材のモザイク（寄せ集め）として記述するという方法は、他ならぬメシアン自身によって始められ、直接・間接の彼の弟子たちに受け継がれたことが確認される。しかし、本当に問題にすべきは、メシアンの著述に従って抽出・整理・分類された諸素材が作品という全体へと形作られていく、その形成作用＝フォルムであることが主張され、その取り組みの一例として、マトンの《天の都の色彩》分析が紹介され、批判・検討される。実際、マトンの分析的想像力（この作品の「現に与えられている素材の配置」は「初期値としてあったシンプルな配置」の「旋回」の結果である）は、本論文がメシアンの音楽に注ぐヴィジョン（メシアンの作品全般の「ブロック」の〔現行配置〕は〔初期配置〕の〔変換〕の結果である）の先駆をなすものとして評価されている。

第2章では、マトンの分析から抽出された諸観念が一般化されて、《天の都の色彩》に限定されない、メシアンの作品一般のフォルム＝形成作用を説明可能にする分析の方法、すなわち、シェーマ分析へと取り込まれていく。前章において「メシアンの作品における素材の〔現行配置〕は〔初期配置〕の〔変換〕の結果である」との見方がすでに示されていたが、ここではさらに議論が進んで、分析においては〔初期配置〕は決して単独では機能しえないこと、また、複数の〔初期配置〕を統括する「根本構造」

としてさらに〔シェーマ〕という新たな観念が要請されること、そして、この〔シェーマ〕と〔初期配置〕を橋渡しするものとして、〔基本プラン〕の観念が必要になることが論じられている。また同時に、配置されるものとしての「ブロック」の概念も明確にされる。こうしてシェーマ分析の次のような記述のプロセスが完成する。つまり、ある作品に見出される根本構造たる〔シェーマ〕を起点に、その投影たる〔基本プラン〕、そのシンプルな実現たるブロックの〔初期配置〕を措定していき、後者の〔変換〕の結果として、現に与えられているブロックの配置たる〔現行配置〕を説明する。

続く3つの章はシェーマ分析を実践する場である。第3章では、《トゥランガリーラ交響曲》の3つずつで対をなす楽章（Ⅱ－Ⅳ－ⅧとⅢ－Ⅶ－Ⅸ）の〔現行配置〕が、それぞれの〔シェーマ〕である〔シンメトリ〕〔層の増加〕を起点にした、多様な実行かつ〔変換〕の結果として記述される。続く第4章では、ソロの楽章を除く《峡谷から星たちへ…》の楽章（Ⅰ－Ⅱ－Ⅲ－Ⅴ－Ⅶ－Ⅷ－Ⅸ－Ⅺ－Ⅻ）の〔現行配置〕が、〔統一シェーマ：シンメトリ〕を起点にした、連続的・発展的な実行かつ〔変換〕の結果として記述される。最後の第5章では、3つあるいは2つで組にされた《彼岸を照らす閃光…》の全楽章の〔現行配置〕が、5つの〔シェーマ〕を起点にした、ほとんど〔変換〕を伴わない静態的な実行の結果として記述される。

こうして描き出されたメシアン音楽のフォルム＝形成作用を総合してみると、その独自性は、全体をコスモスのうちに安らわせようとする〔シェーマ〕の求心力と、それを引き裂き、カオスへと引きずり込もうとする〔変換〕の遠心力との相克のうちにあることが結論される。メシアン音楽とは、このようにして産出される「カオスモス」なのである。